

現代青年の異性間恋愛関係における浮気 —性、浮気および恋愛に対する態度、浮気願望との関連—¹⁾

和田 実*

Infidelity in Heterosexual Romantic Relationships: Effects of Gender, Attitudes Toward Infidelity and Romantic Relationship, and Desire to Have an Affair

Minoru WADA*

This study examined infidelity in heterosexual romantic relationships and its effects of gender, attitudes toward infidelity and romantic relationships, and the desire to have an affair. Participants were heterosexual 77 males and 98 females. They were presented with 25 behaviors which were exchanged between males and females and answered their own permissible level of their partners' behaviors and the estimate of their partner's permissible level of their own behaviors in their romantic relationships. Cluster analysis revealed six clusters: "sexual behaviors", "pleasure behaviors", "companionship and intimate disclosure", "mutual supportive behaviors", "eating and drinking, and giving a present", and "companionate chat". Males' permissible level was higher in sexual behaviors and lower in companionate chat than females'. Their partner's permissible level were higher in sexual behaviors, companionship and intimate disclosure, and mutual supportive behaviors than their own permissible level. Companionate chat was highest and sexual behavior was lowest in both permissible levels. The more permissive attitudes toward infidelity, the stronger desire to have an affair, the less romanticism, and the less romantic power they have, the higher both permissible levels were. The effects on infidelity are discussed.

key words: infidelity, heterosexual romantic relationship, gender differences, attitudes toward infidelity, attitudes toward romantic relationship

問題と目的

婚姻関係や恋愛関係にある者は、性に関して排他的であるべきであり、実際に排他的であると信じられている。しかし、特定のパートナーがいるにもかかわらず、他の者と性的に関わること、すなわち浮気²⁾ (不貞: infidelity)が生じる。例えば、コンドームメーカーの相模ゴム工業が全国 14,100 人を対象に行っ

た調査(相模ゴム工業, 2013)によると、結婚相手・交際相手がいる者のうち、“その相手以外にセックスをする人がいる”という質問に“いない”と回答した者は 78.7%であった。よって、「全体の 21.3%は特定・不特定の相手と浮気をしていることとなります」(相模ゴム工業, 2013)としている。性別にみると、男性 26.9%、女性 16.3%であった。また、最も高い割合は 20 代男性の 31.5%であった。アメリカにお

¹⁾ 本研究は、大橋春香さん(平成 22 年度名城大学人間学部卒業)の卒業研究(論文タイトル「恋愛関係における相手と自分への浮気行動の許容度及びその差異と恋愛に対する態度との関連」)の一部を再分析したものである。データを提供してくれた大橋春香さんに謝意を表します。

* 名城大学人間学部

Faculty of human studies, Meijo University

いても同様の結果である。Blow & Hartnett (2005b)は、いくつかの代表的な全国調査を概観して、アメリカにおいては、異性既婚者の婚外セックスはコミットした関係にある者の25%よりは多くなく、女性より男性の方が多い、と結論づけている。

他にも、浮気には性差のあることが報告されている。女性よりも男性の方がより浮気をする(Allen & Baucom, 2004; Atkins, Baucom, & Jacobson, 2001; Blow & Harnett, 2005a; Sprecher & McKinney, 1993)。女性より男性の方が主たる関係外により多くのセックスパートナーをもち(Blumstein & Schwartz, 1983; Spanier & Margolis, 1983)、主たる関係外のセックスに対して許容的であり(Lieberman, 1988; Thompson, 1984)、浮気の欲求が強い(Prins, Buunk, & VanYperen, 1993)。

また、浮気は、性的浮気と情緒的浮気に分けられ(Shackelford & Buss, 1997)、これらの浮気への反応に性差があることが明らかにされている。進化心理学者は生殖に関わる優先順位が異なるからであると説明する(Buss, 1989, 1994)。すなわち、女性は子どもの親が誰であるかは分かっているが、男性は父親であることに時々確信が持てないので、性的浮気により関心があり、女性は自分の子であることは分かっているため、少しでも良い条件で子育てをするために関係そのものを守ろうとして情緒的浮気をより心配するというのである。

そして、妻の浮気は罰せられるが、夫の浮気は厳しく罰せられないどころか、問題にさえされないという不倫のダブルスタンダードもある。夫の浮気について特別な罰則を設けているような文化は、近代の男女平等社会を除いてほとんどない(Daly & Wilson, 1983)という。

さらに、浮気と関連する他の要因も明らかとなっている。浮気や婚外セックスに対する態度が許容的な者ほど、浮気をしやすい(Treas & Giesen, 2000; Weis & Jurich, 1985)。さらに、関係要因とも関わる。対人葛藤、怒り、衡平性、コミットメントや関係満足度の低さなどが浮気に結びつく。例えば、Weis & Jurich (1985)は、既婚者を対象に調べ、情緒的浮気をしている女性は男性と比べ結婚に対する不満が大

きく、性的および情緒的浮気をしている者(男女とも)は、結婚に対する不満が最も大きい、ことを明らかにしている。また、Barta & Kiene (2005)は、恋愛相手に浮気をしている大学生を対象に浮気に至る4つの動機を見出している。そして、浮気をするのに重要な動機は、“関係不満”と“無視”であり、“セックス”や“怒り”はあまり重要でないことを明らかにしている。また、性差が得られ、女性は男性よりも関係不満の得点が高く、男性は女性よりもセックスの得点が高かった。

では、どのような行動をとると浮気となるのであろうか。これまでの研究を概観したBlow & Hartnett (2005a)によると、カップルセラピストが出くわす最も複雑な論争点であり、セラピストの実践に重要であるにもかかわらず、厳密な研究が驚くほどない、という。主な研究のほとんどが、研究者の意見、臨床経験、あるいは限られた研究に基づいており、浮気の定義はそれぞれの研究ごとに多種多様な方法でなされている、という。そして、これまでの多くの研究では、たくさんの行動(活動)―例えば、情事を重ねる、婚外関係、性交、オーラルセックス、キス、愛撫、友人関係以上の情緒的結びつき、友人関係、インターネットの関係、ポルノの使用などをあげて調べている、という。

本邦においては、増田(1994)が大学生を対象に恋愛関係の“排他性”(exclusivity)について調べている。挨拶からキスまでの15行動について、“好ましい～好ましくない”で尋ねている。そして、“誕生日の贈り物”から“好ましくない”、すなわち恋愛関係での排他性に抵触することを明らかにしている。

また、船谷・田中・橋本・高木(2006)や牧野(2011)も様々な行動を提示し、それらの行動が“浮気かどうか”を尋ねている。牧野(2011)は、増田(1994)の行動を参考に作成した19行動について“浮気である、どちらともいえない、浮気ではない”のいずれであるかを尋ねている。結果によると、“異性に挨拶をした”、“異性と立ち話をしていた”の場合、90%以上の人々が“浮気でない”と判断し、“二人だけで映画を見に行った”や“二人だけで食事に行った”という行動で、浮気であると判断する人が約半数に

²本研究は青年(大学生)を対象としているので、“浮気”とし、夫婦間の infidelity の先行研究も“不貞”ではなく“浮気”と訳して統一させている。

なり、“キスをしていた”、“性的関係を持っていた”では、95%以上の方が浮気であると判断していた。

Blow & Hartnett (2005a) が言うように、研究によって“浮気”の意味する内容が異なり、どの行動をもって浮気とされるのが明確になっていない。そこで、本研究では様々な行動を提示し、恋愛関係において、どの行動をもって“浮気”と考えるのかについて調べ、それらの行動を判断の類似度によっていくつかのカテゴリに分けることを目的とする。

なお、本研究では、各行動を“許せる～許せない”で尋ねる。そして、“許せない”をもって浮気と判断する。“浮気かどうか”と尋ねると、個人の考えだけでなく、社会の考えが入り込む可能性があると思われるからである。さらに、この際、恋人が各行動をとった場合に自身が許せるかどうかの“自身の許容度”だけでなく、自身が各行動をとったときに、恋人が許すと思うかどうかの“恋人の許容度認知”の両面から調べる。

どの行動をもって浮気とするかに性差はあるのだろうか。牧野(2011)は性差を検討していないが、増田(1994)は、全体的には性差はないと考えて良いだろう、としている。ただし、性に対する態度は女性より男性の方が寛容である(和田・西田, 1991)。よって、自身の許容度か恋人の許容度認知に関わらず女性より男性の方が浮気に対して、特に性に関連する行動に対する許容度が高いであろう(仮説1)。

また、既に述べたように、浮気や婚外セックスに対する態度が許容的な人ほど、浮気をしやすい(Treas & Giesen, 2000; Weis & Jurich, 1985)ことが明らかとなっている。さらに、船谷ら(2006)は、浮気経験の有無と浮気に対する態度に関連があり、浮気を許せず避けられると思っている者は、浮気経験は無いが被浮気経験が有る者と両方ない者で多く、浮気経験は有るが被浮気経験が無い者で少ないことを明らかにしている。そこで、本研究では、浮気に対する態度と浮気願望が浮気行動の許容度と関連があるのかを調べる。先行研究と同様に、浮気に対する態度が寛容な者ほど、また浮気願望が強い者ほど、各行動の許容度が高いであろう(仮説2)。

さらに、本研究は恋愛関係における浮気を調べるので、恋愛に対してどのような考え方を持っているかが浮気の判断に影響するであろう。和田(1994)によると、恋愛に対する態度はロマンチックか否かの

一次元として研究され始め、その後、複数の次元で調べられるようになってきたという。そこで、ロマンチックな態度等を含めて恋愛に対して真摯な者ほど、各行動の許容度が低いであろう(仮説3)。さらに、現在恋愛中の者には恋人に対する好意度を尋ね、好意度と許容度の関連を調べる。本研究では、許せるかどうかで尋ねているので、恋愛相手を好きな者ほど各行動の許容度が低いであろう(仮説4)。

恋人の許容度認知についても同様であろう。仮説1~4に対応する仮説として仮説1-1, 2-1, 3-1, 4-1としておく。

方 法

調査対象者

大学生193名に調査を行い、本人が異性愛者でないと回答した者(15名)、無回答が多い者(3名)を除き、男性77名、女性98名、計175名を分析対象とした。平均年齢は男性20.44(0.95)、女性19.91(1.02)で、男性の方が高かった($t(173)=3.54, p<.001$)。調査用紙の最初のページに、研究目的のみに使用すること、データは統計的に処理され個人の結果が明らかになることはないことを記した。さらに、調査の実施に際しては、調査への参加は強制されるものではなく、回答するか否かは自由に決めることができることを口頭で伝えた。したがって、倫理的な問題はない。なお、調査は2010年10月から11月にかけて実施した。

質問紙の構成

質問紙は、個人的背景要因、各行動の許容度(自身の許容度と恋人の許容度認知)、浮気に対する態度、浮気願望、恋愛に対する態度を尋ねる項目からなっていた。調査対象者には浮気行動かどうかに関して2つの許容度の回答を求めたので、回答順の影響を相殺するために、自身の許容度と恋人の許容度認知の順序をかえた質問紙を作成して実施した。その際、各項目の並び順もかえた。

個人的背景要因 最初に、年齢、学年、性について尋ねた。さらなる項目は、倫理的問題に配慮するために質問紙の最後に配置し、あらためて“差し支えなければお答えください”と記した。そこでは、性指向(異性愛者、異性愛者でない)、現在の交際状況(恋人の有無、恋人がいる場合には、恋人に対する好意度(1~10点で、高得点ほど好意度が高い)と交際期

Table 1 行動(項目)ごとの平均値(SD)と性差(t検定結果)

	自身の許容度			恋人の許容度認知		
	男性	女性	t 値	男性	女性	t 値
5. 異性と子供の頃の話をする。	3.65 (0.66)	3.79 (0.58)	1.54	3.74 (0.59)	3.85 (0.46)	1.34
6. 異性と友人の話をする。	3.64 (0.69)	3.91 (0.33)	3.43***	3.53 (0.75)	3.72 (0.57)	1.92 [†]
4. 異性と家族の話をする。	3.60 (0.78)	3.75 (0.58)	1.47	3.51 (0.72)	3.60 (0.74)	0.86
16. 異性の仕事や勉強の手伝いをする。	3.10 (0.97)	3.06 (0.96)	0.29	3.43 (0.79)	3.30 (0.84)	1.04
8. 男女混合の複数人で遊びに行く。	2.97 (1.08)	3.04 (0.93)	0.44	2.99 (0.99)	3.02 (0.91)	0.23
10. 異性に相談をする。	2.95 (1.11)	2.75 (0.96)	0.25	2.93 (1.01)	3.06 (0.88)	0.88
3. 異性と用も無いのに電話やメールをする。	2.85 (1.12)	2.66 (1.04)	1.17	2.51 (1.02)	2.64 (1.02)	0.88
1. 異性と食事にでかける。	2.83 (1.06)	2.74 (0.93)	0.59	2.44 (1.05)	2.64 (1.00)	1.30
20. 異性にプレゼントをする。	2.80 (1.10)	2.36 (1.10)	2.59**	2.90 (0.97)	2.80 (1.07)	0.64
25. 異性とお酒を飲みに行く。	2.69 (1.18)	2.52 (1.05)	1.02	2.64 (1.00)	2.59 (1.05)	0.28
18. 異性と寂しいときに話をする。	2.36 (1.12)	2.08 (0.92)	1.82 [†]	2.53 (1.07)	2.48 (0.94)	1.30
7. 異性と用も無いのに会う。	2.39 (1.08)	2.19 (1.00)	1.29	2.10 (1.05)	2.27 (0.97)	0.35
2. 合同コンパに参加する。	2.27 (1.06)	2.13 (1.06)	0.86	2.03 (1.03)	2.14 (1.03)	0.75
12. 異性と一緒に買い物に行く。	2.25 (1.05)	2.24 (1.01)	0.08	2.44 (1.05)	2.64 (1.00)	0.97
22. 異性の肩や身体に触れる。	2.23 (1.13)	1.73 (0.91)	3.24**	2.48 (1.07)	2.34 (1.01)	0.89
19. 異性に恋人にもみせない面をみせる。	2.19 (1.10)	1.84 (0.95)	2.31*	2.39 (1.14)	2.12 (0.93)	1.71 [†]
24. 異性の部屋を訪問する。	1.96 (1.11)	1.68 (0.90)	1.85	2.53 (1.10)	2.26 (1.06)	1.70 [†]
9. 異性を好きになる。	1.81 (1.08)	1.40 (0.79)	2.89**	1.66 (1.08)	1.48 (0.82)	1.27
14. キャバクラやホストクラブに行く。	1.70 (1.03)	2.04 (1.16)	2.03*	1.86 (1.09)	1.95 (1.10)	0.55
13. 異性と手を繋いだり腕をくんだりする。	1.52 (0.93)	1.34 (0.69)	1.46	1.56 (0.87)	1.61 (0.88)	0.40
17. 異性と抱き合う。	1.51 (0.91)	1.26 (0.60)	2.16*	1.48 (0.94)	1.36 (0.63)	1.04
15. 異性と真剣に付き合う。	1.36 (0.83)	1.15 (0.55)	2.00*	1.24 (0.73)	1.15 (0.53)	0.88
21. 異性とキスする。	1.22 (0.65)	1.11 (0.45)	1.32	1.24 (0.71)	1.15 (0.51)	0.91
11. 異性とベッティング(性的な愛撫)する。	1.19 (0.56)	1.11 (0.41)	1.11	1.25 (0.69)	1.20 (0.61)	0.43
23. 異性と性交する。	1.19 (0.65)	1.11 (0.48)	0.95	1.26 (0.79)	1.11 (0.48)	1.52

注) [†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

自身の許容度の場合は、各項目の頭に“あなた以外の”もしくは“恋人が”がつき、恋人の許容度認知の場合は、“恋人以外の”もしくは“あなたが”がつく。たとえば、最初の“異性と子供の頃の話をする”の場合、自身の許容度は“あなた以外の異性と子供の頃の話をする”となり、恋人の許容度認知の場合は“恋人以外の異性と子供の頃の話をする”となる。

間)、過去の交際経験の有無を尋ねた。他に、複数との同時付き合いの経験等を尋ねたが、対象となる者が少なく本論文では扱わなかった。

各行動の許容度 船谷ら(2006)を参考に、25項目を作成し(Table 1)、自身の許容度と恋人の許容度認知について尋ねた。自身の許容度の回答は、恋人が各行動をとった場合、私は恋人を“許せない(1)～許せる(4)”の4件法であった。恋人の許容度認知の回答は、あなたが各行動をとった場合、恋人はあなたを“許さない(1)～許す(4)”の4件法であった。

浮気に対する態度 船谷ら(2006)による浮気に対する態度尺度を用いた。この尺度は、“浮気をされても、自分がその人のことを本当に好きなら許せる”、“浮気は仕方ないものである”などの12項目からなる。回答は、“そう思わない(1)～そう思う(5)”の5件法であった。

浮気願望 “浮気をしてみたい”の1項目で尋ねた。回答は、“そう思わない(1)～そう思う(5)”の5件法であった。回答方法が浮気に対する態度と同じであったので、浮気に対する態度項目の中に入れて実施した。

恋愛に対する態度 和田(1994)による恋愛に対する態度尺度を用いた。この尺度は、“恋愛は男と女の間のもっとも高い目標である”、“恋愛はあらゆる関係の中でもっとも重要なものである”などの恋愛至上主義(11項目)、“恋愛は物事をうまく為すための励みをもたらす”、“強力な愛はすべての困難や障害を乗り越える”などの恋愛のパワー(8項目)、“人は社会的地位にかかわらず、愛する人と結婚すべきである”、“経済的な安心感、結婚相手を選ぶ前に注意深く考慮すべきである”などの結婚への恋愛(8項目)、“ある人と恋愛状態にあるとき、他の誰にも関心をも

たない”，“真の恋愛状態というのは、永遠の恋愛である”などの理想の恋愛（7項目）の4つの下位尺度からなる。回答は，“そう思わない（1）～そう思う（5）”の5件法であった。

結 果

個人的背景要因

現在交際中の男性30名、女性41名、非交際中の男性47名、女性57名であり、男女の割合に差はなかった（ $\chi^2(1) = 0.15, n.s.$ ）。現在交際中の者の交際期間（月数）は男性（ $N=26$ ）：16.00（13.66）、女性（ $N=39$ ）：10.03（10.51）で、男性の方が長い傾向にあった（ $t(63) = 1.99, p < .10$ ）が、恋人に対する好意度に性差はなかった（男性（ $N=27$ ）：8.59（4.93）、女性（ $N=38$ ）：8.66（1.38）、 $t(63) = 0.78, n.s.$ ）。また、これまで交際経験が有る男性42名、女性61名、無い男性13名、女性13名であり、男女の割合に差はなかった（ $\chi^2(1) = 0.72, n.s.$ ）。

以上のことから、現在および過去の交際の有無による性差があったとしても、それらによる影響は本研究では相殺されていると言えよう。

行動（項目）ごとの結果と性差

行動（項目）ごとに、男女、自身の許容度・恋人の許容度認知別の平均値（SD）および t 検定結果をTable 1に示した。なお、項目の並びは、男性評定による自身の許容度の高得点順に並んでいる。

中立点の2.5点より大きい、すなわち許容できる行動は、友人や家族の話をしたり、勉強の手伝い、食事やお酒を飲みに行くまでである。

次に、性差を検討する。自身の許容度では、9項目で有意もしくは有意な傾向の性差が得られた。“6. 異性と友人の話をする”、“14. キャバクラやホストクラブに行く”で男性より女性の方が許容度が高く、“20. 異性にプレゼントをする”、“18. 異性と寂しいときに話をする”、“22. 異性の肩や身体に触れる”、“19. 異性に恋人にもみせない面をみせる”、“9. 異性を好きになる”、“17. 異性と抱き合う”、“15. 異性と真剣に付き合う”は、女性より男性の方が許容度が高かった。

恋人の許容度認知では、3項目で有意な傾向の性差が得られた。“6. 異性と友人の話をする”は男性より女性の方が許容度認知が高く、“19. 異性に恋人にもみせない面をみせる”、“24. 異性の部屋を訪問す

る”は、女性より男性の方が許容度認知が高い傾向にあった。

尺度の構成

浮気行動の許容度 調査対象者全体で、まず自身の許容度についてクラスター分析（Ward法）を行った。解釈のしやすさを考慮し、6つのクラスターからなると判断した（Figure 1）。Figure 1の上から順に、第Iクラスターとする。第Iクラスターは、“21. あなた以外の異性とキスする”、“23. あなた以外の異性と性交する”などからなり、“性的行動”を表すと考えられる。第IIクラスターは、“2. 恋人が合同コンパに参加する”、“14. 恋人がキャバクラやホストクラブに行く”からなり、“遊び行動”を表すと考えられる。第IIIクラスターは、“12. あなた以外の異性と一緒買い物に行く”、“19. 異性に恋人にもみせない面をみせる”などからなり、“共行動・内面開示行動”を表すと考えられる。第IVクラスターは、“10. あなた以外の異性に相談する”と“16. あなた以外の異性の仕事や勉強の手伝いをする”からなり、“相互援助行動”を表すと考えられる。第Vクラスターは、“1. あなた以外の異性と食事に出かける”、“20. 異性にプレゼントをする”などからなり、“飲食・プレゼント行動”を表すと考えられる。第VIクラスターは、“6. あなた以外の異性と友人の話をする”、“4. あなた以外の異性と家族の話をする”などからなり、“友愛的会話”を表すと考えられる。

これらのクラスターに基づいて、6つの下位尺度を作成した。よって、性的行動7項目、遊び行動2項目、共行動・内面開示行動6項目、相互援助行動2項目、飲食・プレゼント行動5項目、友愛的会話3項目からなる。そして、これらの項目得点の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。尺度得点が高いほど、各行動についての許容度が高いことを表す。

次に、恋人の許容度認知についても同様のクラスター分析を行ったところ、自身の許容度と大きな差異は見出されなかった。そこで、許容度間の比較が可能なように、自身の許容度と同じ項目で同じように尺度構成を行った。

各尺度についてChronbachの α 係数を算出したところ、自身の許容度、恋人の許容度認知の順に、性的行動.90、.91、遊び行動.64(.50)、.83(.60)、共行動・内面開示行動.88、.89、相互援助行動.64(.48)、.58

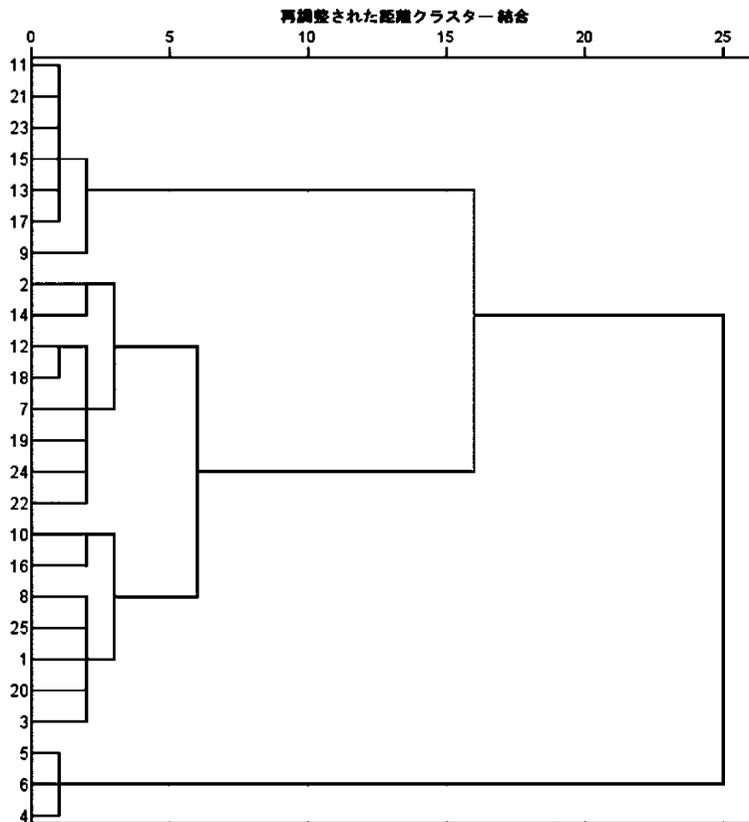


Figure 1 自身の許容度のクラスター分析
 注) 左端の番号は、Table 1の項目番号に対応している。

(.34), 飲食・プレゼント行動.87, .87, 友愛的会話.93, .79であった(遊び行動と相互援助行動は2項目のため、括弧内に相関係数も示した)。相互援助行動の恋人の許容度認知の α 値は項目数が2ということもあり、少し低かったがこのまま用いた。

既存の尺度 従来通りの尺度構成を行った。そして、尺度ごとに α 係数を算出した。浮気に対する態度は、.80であった。恋愛に対する態度は、恋愛至上主義.80, 恋愛のパワー.74, 理想の恋愛.57, 結婚への恋愛.46であった。理想の恋愛と結婚への恋愛は、 α 値が低かったので以後の分析には用いないこととした。和田(1994)においても、これら2つの下位尺度の α 係数は、.6台と他の下位尺度と比べて低く、尺度として問題があるのかも知れない。

これらの項目得点の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。数値が大きいくほど、浮気に寛容で、恋愛至上主義的で、恋愛のパワーを感じているこ

とを示す。

性および自身と恋人の認知による行動の許容度

性、自身および恋人の認知別の6つの行動の許容度の平均値(SD)と分散分析結果(F値)をTable 2に示した。そして、行動ごとに、性(2)×許容度(2:自身, 恋人の認知)の分散分析を行った³⁾。許容度は参加者内要因である。

性的行動は、性($F(1,166) = 6.67, p < .05$)と許容度($F(1,166) = 4.52, p < .05$)の主効果が有意であった。前者は女性より男性の方が許容度が高く、後者は自身の許容度よりも恋人の許容度認知の方が高いことを表している。

共行動・内面開示行動は、許容度($F(1,167) = 14.50, p < .001$)の主効果が有意であった。これは、自身の許容度より恋人の許容度認知の方が高いことを表している。

相互援助行動は、許容度($F(1,170) = 6.93, p < .01$)

Table 2 性、自身および恋人の認知別の行動の許容度の平均値 (SD) と分散分析結果 (F 値)

	性的行動		遊び行動		共行動・内面開示		相互援助		飲食・プレゼント		友愛的会話	
	男性	女性										
自身	1.38 (0.69)	1.16 (0.32)	1.79 (0.90)	1.79 (0.85)	2.07 (0.92)	1.80 (0.69)	2.74 (1.02)	2.69 (0.87)	2.42 (0.96)	2.29 (0.85)	3.35 (0.93)	3.66 (0.66)
恋人	1.46 (0.80)	1.29 (0.45)	1.82 (1.05)	1.89 (0.97)	2.21 (0.94)	2.14 (0.80)	2.84 (0.93)	2.98 (0.83)	2.42 (0.93)	2.46 (0.84)	3.42 (0.75)	3.65 (0.56)
分散分析結果												
性	6.67*		0.10		2.38		0.18		0.15		8.29**	
自身・恋人	4.52*		0.72		14.50***		6.93**		1.61		0.29	
交互作用	0.05		0.25		2.52		1.65		1.51		0.52	
df	1,166		1,171		1,167		1,170		1,168		1,170	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

自身：自身の許容度，恋人：恋人の許容度認知，を表す。

の主効果が有意であった。これは、自身の許容度より恋人の許容度認知の方が高いことを表している。

友愛的会話は、性の主効果 ($F(1,170) = 8.29, p < .01$) が有意であった。これは男性よりも女性の方が許容度が高いことを表している。

性および各行動による自身の許容度

自身の許容度について、性 (2) × 行動 (6) の分散分析を行った。行動は参加者内要因である。

行動の主効果 ($F(5,830) = 304.20, p < .001$) と性 × 行動の交互作用が有意であった ($F(5,825) = 5.19, p < .001$)。有意な交互作用について多重比較 (Bonferroni 法。以下も同様) を行ったところ、男性は共行動・内面開示行動と遊び行動間の差は有意な傾向 ($p < .10$) であったが、それ以外の行動間はすべて有意であった (飲食・プレゼント行動と相互援助行動の間は、 $p < .01$ 、それ以外はすべて $p < .001$)。女性は、共行動・内面開示行動と遊び行動間を除いたすべての行動間で有意であった (すべて $p < .001$)。すなわち、男女とも、性的行動の許容度が最も低く、次いで遊び行動、共行動・内面開示行動、飲食・プレゼント行動、相互援助行動であり、最も許容度が高いのは友愛的会話であった (女性の遊び行動と共行動・内面開示行動間に差はない)。中立点からみると、相互援助行動と友愛的会話以外は許容していない。

また、性差は、性的行動 ($p < .01$) と友愛的会話 ($p < .05$) で有意で、共行動・内面開示行動 ($p < .10$)

で有意な傾向にあった。性的行動は女性より男性の方が、友愛的会話は男性より女性の方が許容度が高く、共行動・内面開示行動は女性より男性の方が許容度が高い傾向にあった。

性および各行動による恋人の許容度認知

恋人の許容度認知について、性 (2) × 行動 (6) の分散分析を行った。行動は参加者内要因である。

行動の主効果 ($F(5,810) = 297.13, p < .001$) と性 × 行動の交互作用 ($F(5,810) = 3.02, p < .01$) が有意であった。有意な交互作用について多重比較を行ったところ、男女ともすべての行動間で有意で、一部有意水準が異なるということであった (男性：性的行動と遊び行動間は $p < .05$ 、それ以外はすべて $p < .001$ 、女性：遊び行動と共行動・内面開示行動間は $p < .05$ 、それ以外はすべて $p < .001$)。すなわち、男女とも、性的行動の許容度認知が最も低く、次いで遊び行動、共行動・内面開示行動、飲食・プレゼント行動、相互援助行動であり、最も許容度認知が高いのは友愛的会話であった。中立点からみると、相互援助行動と友愛的会話以外は許容されないと認知している。

また、性差は、性的行動 ($p < .05$) と友愛的会話 ($p < .05$) で有意であった。性的行動は女性より男性の方が、友愛的会話は男性より女性の方が許容度認知が高かった。

³性 × 恋人の有無 × 許容度の分散分析を行ったが、恋人の有無の主効果及び恋人の有無が関わる交互作用のいずれも有意ではなかったため、恋人の有無の要因を除いた分散分析を行った。増田 (1994) も、恋愛関係における排他性は実際相手の有無による差はないと考えて良いだろうとしている。

Table 3 男女別の許容度との相関関係 (r)

	性的行動		遊び行動		共行動・内面開示		相互援助		飲食・プレゼント		友愛的会話	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
浮気に対する態度												
自身	.44***	.35***	.30**	.29**	.31**	.23*	.10	.01	.22 [†]	.20 [†]	.24*	.09
恋人	.49***	.16	.37***	.33***	.41***	.17	.27*	.07	.52***	.22*	.29*	.01
浮気願望												
自身	.34***	.20*	.37***	.30**	.15	.18 [†]	-.01	.13	.12	.25*	.04	.22*
恋人	.12	.02	.03	.16	-.21 [†]	-.06	-.21 [†]	-.17	-.24*	-.06	.10	-.13
恋愛に対する態度												
恋愛至上主義												
自身	-.02	-.01	-.13	-.02	-.24*	-.14	-.20 [†]	-.25*	-.27*	-.09	-.14	-.19 [†]
恋人	.13	.11	.12	.03	.04	.07	-.11	.02	-.08	.13	-.24*	-.07
恋愛のパワー												
自身	-.35**	-.21*	-.24*	.01	-.15	-.12	.02	-.17	-.12	-.01	.04	.03
恋人	-.35**	-.06	-.23*	-.04	-.11	.05	.02	.08	-.14	.07	-.03	.02
恋人に対する好意度												
自身	-.22	-.10	-.03	.00	.00	-.03	.16	.24	-.02	.00	.20	-.09
恋人	-.30	-.27	-.36 [†]	-.01	-.24	.09	.05	.18	-.08	.09	.11	-.07

注) [†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

自身：自身の許容度，恋人：恋人の許容度認知，を表す。恋人に対する好意度は現在恋人がいる者のみの回答である。

浮気に対する態度、浮気願望、恋愛に対する態度および恋人に対する好意度と許容度との関連

性、行動ごとに、浮気に対する態度、浮気願望、恋愛に対する態度、恋人に対する好意度(現在恋愛関係にある者のみ)と自身および恋人による許容度認知との相関係数を Table 3 に示した。

なお、各尺度の平均値 (SD) は、男女の順に、浮気に対する態度 3.31 (0.72), 3.46 (0.65), 浮気願望 2.36 (1.36), 1.97 (1.31), 恋愛至上主義 2.52 (0.65), 2.64 (0.67), 恋愛のパワー 3.38 (0.70), 3.63 (0.58), 好意度 8.59 (4.93), 8.66 (1.38) であった。性差を検討したところ、恋愛のパワーに有意差 ($t(172) = 2.60$, $p < .01$), 浮気願望に有意な傾向 ($t(173) = 1.94$, $p < .10$) が得られた。すなわち、男性より女性の方が恋愛のパワーを感じ、浮気願望が低い傾向があった。これらの性差は先行研究と同じであった。

自身の許容度との関連 浮気に対する態度は、相互援助行動と女性の友愛的会話を除いて、正の有意もしくは有意な傾向の相関係数が得られた。すなわち、浮気に対して寛容である者ほど、性的行動、遊び行動、共行動・内面開示行動、飲食・プレゼント行動、友愛的会話(男性のみ)の許容度が高かった。

浮気願望は、男女とも、性的行動と遊び行動との間

に正の有意な相関係数が得られた。すなわち、浮気願望が強い者ほど、性的行動と遊び行動の許容度が高かった。また、女性は、飲食・プレゼント行動、および友愛的会話との間に正の有意な相関係数、共行動・内面開示行動との間に正の有意な傾向の相関係数が得られた。すなわち、浮気願望が強い女性は、これらの行動の許容度が高かった。

恋愛に対する態度では、恋愛至上主義と共行動・内面開示行動(男性のみ)、相互援助行動、飲食・プレゼント行動(男性のみ)、友愛的会話(女性のみ)との間に負の有意もしくは有意な傾向の相関係数が得られた。すなわち、恋愛を至上のものと考えている者ほど、共行動・内面開示行動、相互援助行動、飲食・プレゼント行動、友愛的会話の許容度が低かった。また、恋愛のパワーと性的行動、遊び行動(男性のみ)との間に負の有意な相関係数が得られた。すなわち、恋愛のパワーを感じている者ほど、性的行動、遊び行動の許容度が低かった。

恋人に対する好意度との関連はなかった。

恋人の許容度認知との関連 浮気に対する態度は、女性の性的行動、共行動・内面開示行動、相互援助行動、および友愛的会話を除いて、負の有意な相関係数が得られた。すなわち、浮気に対して寛容である

者ほど、恋人は性的行動(男性のみ)、遊び行動、共行動・内面開示行動(男性のみ)、相互援助行動(男性のみ)、飲食・プレゼント行動、友愛的会話(男性のみ)の恋人の許容度を高く認知していた。

浮気願望は、男性のみで、飲食・プレゼント行動と負の有意な相関係数、共行動・内面開示行動と相互援助行動とは負の有意な傾向の相関係数が得られた。すなわち、浮気願望が強い男性ほど、これらの行動の恋人の許容度を低く認知していた。

恋愛に対する態度の恋愛至上主義は男性の友愛的会話のみとの間に負の有意な相関係数が得られた。すなわち、恋愛を至上のものと考えている男性ほど、友愛的会話の恋人の許容度を低く認知していた。また、恋愛のパワーは男性の性的行動と遊び行動との間にのみ負の有意な相関係数が得られた。すなわち、恋愛のパワーを感じている男性ほど、これらの行動の恋人の許容度を低く認知していた。

恋人に対する好意度は、男性の遊び行動との間のみで有意な傾向の負の相関係数が得られた。すなわち、恋人のことを好きな男性ほど、遊び行動の恋人の許容度を低く認知していた。

考 察

行動ごとの許容度とその性差

中立点(2.5点)より大きい、すなわち許容できる行動は、友人や家族の話をしたり、仕事や勉強の手伝い、食事やお酒を飲みに行くまでである。増田(1994)や牧野(2011)も、本研究と同様に、“悩み事の相談”までは中立点を超える、ないしは浮気でないとする者が多い。ただし、牧野(2011)では“二人だけで食事に行った”を約半数の者が“浮気である”としている。本研究では、“異性と食事に出かける”、“異性とお酒を飲みに行く”と尋ねており、“二人で”と想定しなかった者がいたので、許容度が中立点を超えたのかも知れない。

性差は、自身の許容度では9項目で得られた。“友人の話をする”と“キャバクラやホストクラブに行く”は男性より女性の方が許容度が高かった。一方、“プレゼントをする”、“寂しいときに話をする”、“肩や身体に触れる”、“恋人にもみせない面をみせる”、“好きになる”、“抱き合う”、“真剣に付き合う”は、女性より男性の方が許容度が高かった。恋人の許容度認知では、3項目で性差のある傾向にあった。“友

人の話をする”は男性より女性の方が許容度認知が高く、“恋人にもみせない面をみせる”、“部屋を訪問する”は、女性より男性の方が許容度認知が高い傾向にあった。

以上のように、限られた数の項目ではあるが、性差はあると言えよう。しかも、全般的に、女性より男性の方が許容度が高いと言えよう。女性よりも男性の方が実際に浮気する(Allen & Baucom, 2004; Atkins, Baucom, & Jacobson, 2001; Blow & Harnett, 2005a; Sprecher & McKinney, 1993)し、主たる関係外のセックスに対して許容的であり(Lieberman, 1988; Thompson, 1984)、浮気欲求が強い(Prins, Buunk, & VanYperen, 1993)からであろう。性的行動に性差が見られなかったのは、男女ともに性的行動は許容しないからであろう。既に述べたように、進化心理学の説明では男性の方が女性の性的浮気に寛容でないと予測されるのであるが、本研究で差はみられなかった。未婚の青年が対象であったからだろうか。今後の検討課題である。

性および自身と恋人の認知による行動の許容度

いずれの行動も、性×許容度の交互作用が有意ではなかったので、性と許容度を分けて考察する。

性差は性的行動と友愛的会話で得られた。性的行動は女性より男性の方が許容度が高く、友愛的会話は男性よりも女性の方が許容度が高かった。よって、男性の方が性に関連する行動に関して許容的であろうとの仮説1および仮説1-1は支持されたとと言える。性的行動については、女性より男性の方が性に対して寛容である(和田・西田, 1991)からであろう。進化心理学の考えからすると、男性による性的行動の自身の許容度(恋人である女性の性的行動を許容する程度)は低くなるはずであるが、行動ごとの結果と同じく差はなかった。それよりも、自身の性に対する態度が寛容かどうかの影響すると言うことであろう。

また、同性友人関係についての研究ではあるが、男性よりも女性の方が、親友と感情や友人、家族、個人的な問題について互いに話すことが多いことが明らかとなっている(Aries & Johnson, 1983; Caldwell & Peplau, 1982)。女性は話すことが好きなのである。よって、友愛的会話の許容度が男性より女性の方が高くなったのであろう。

自身と恋人の許容度認知の差異は、性的行動、共行

動・内面開示行動, および相互援助行動で得られた。いずれの行動も自身の許容度よりも恋人の許容度認知の方が高かった。すなわち, 自分よりも恋人の方が許してくれるだろうと認知していた。増田(1994)も, 相手の行動よりも自分の行動についての排他性評価の方が低いことを明らかにしている。誰しも自分には甘いと言えよう。

行動に対する自身および恋人の許容度認知

自身の許容度と恋人の許容度認知ともに, 性的行動が最も低く, 次いで遊び行動, 共行動・内面開示行動, 飲食・プレゼント行動, 相互援助行動であり, 最も許容度が高いのは友愛的会話であった(自身の許容度の女性の遊び行動と共行動・内面開示行動間に差異はない)。

中立点(2.5点)からすると, 許せる(許す), すなわち浮気ではない行動は友愛的会話と相互援助行動であり, それ以外の行動はすべて許せない(許さない), すなわち浮気と言うことである。本研究では, 自分が恋人の行動を, あるいは自分の行動を恋人が“許すかどうか”を尋ねているので, 評価が厳しくなったのかも知れない。

浮気に対する態度, 浮気願望, 恋愛に対する態度および恋人に対する好意度と許容度との関連

自身の許容度との関連では, 浮気に対して寛容である者ほど, 性的行動, 遊び行動, 共行動・内面開示行動, 飲食・プレゼント行動, 友愛的会話(男性のみ)の許容度が高かった。また, 浮気願望が強い者ほど, 性的行動と遊び行動の許容度が高かった。さらに, 浮気願望が強い女性は, 飲食・プレゼント行動, 友愛的会話, および共行動・内面開示行動の許容度が高かった。以上のことから, すべての行動との間に関連がみられたわけではないが, 浮気に対する態度が寛容な者ほど, また浮気願望が強い者ほど, 各行動の許容度が高いとの仮説2は支持されたと言えよう。

恋愛に対する態度では, 恋愛を至上のものと考えている者ほど, 共行動・内面開示行動, 相互援助行動, 飲食・プレゼント行動, 友愛的会話の許容度が低かった。また, 恋愛のパワーを感じている者ほど, 性的行動, 遊び行動(男性のみ)の許容度が低かった。以上のことから, すべての行動との間に関連がみられたわけではないが, 恋愛に対して真摯な者ほど, 各行動の許容度が低いとの仮説3は支持されたと言えよう。

恋人に対する好意度との関連はみられなかった。よって, 恋愛相手を好きな者ほど許容度が低いとの仮説4は支持されなかった。交際期間が男女とも平均1年前後で, 好意度が10点満点で8点台後半と高く, ばらつきが生じなかったからであろう。

恋人の許容度認知との関連では, 浮気に対して寛容である者ほど, 性的行動(男性のみ), 遊び行動, 共行動・内面開示行動(男性のみ), 相互援助行動(男性のみ), 飲食・プレゼント行動, 友愛的会話(男性のみ)の恋人の許容度を高く認知していた。すべての行動との間に関連がみられたわけではないが, 浮気に対する態度が寛容な者ほど, 各行動の恋人の許容度を高く認知していた。よって, 仮説2-1は支持されたと言えよう。

さらに, 浮気願望が強い男性ほど, 共行動・内面開示行動, 相互援助行動, 飲食・プレゼント行動の恋人の許容度を低く認知していた。浮気願望と飲食・プレゼント行動間以外の相関は有意な傾向にしかすぎなかったが, これらの結果は仮説と逆であった。本研究からでは理由は分からないが, 浮気願望が強い男性は, 日常行動から恋人には“浮気性”と思われており, “恋人は許してくれない”と認知しているのだろうか。今後の検討課題である。

恋愛に対する態度では, 恋愛を至上のものと考えている男性ほど, 恋人の友愛的会話の許容度認知が低かった。また, 恋愛のパワーを感じている男性ほど, 恋人の性的行動, 遊び行動の許容度認知が低かった。以上のことから, すべての行動との間に関連がみられたわけではないが, 恋愛に対して真摯な者ほど, 各行動の恋人の許容度を低く認知するとの仮説3-1は男性のみで支持されたと言えよう。女性より男性の方が浮気行動評価のばらつきが大きいので, 相関が有意になりやすいであろう。

恋人に対する好意度が高い男性ほど, 恋人の遊び行動の許容度を低く認知する傾向にあった。よって, 恋愛相手を好きな者ほど, 恋人の各行動の許容度を低く認知するとの仮説4-1は男性の一部でのみ支持されたといえる。しかもこの関係は有意な傾向にしかすぎず, さらに検討が必要であろう。

最後に, 本研究の問題点と今後の課題についてである。まず, 浮気を尋ねる項目に不備があったかも知れない。既に記したように, 本研究では“異性と食事に出かける”等と尋ねており, “二人で”と記されて

いなかったで“二人で”と想定した者としなかった者がいたかも知れない。これらを明確にして調べる必要がある。

第二に、さらなる個人差の要因との関連を調べることである。例えば、Weis & Jurich (1985) は教育レベルが高い者ほど、大都市圏出身者ほど、婚外セックスに許容的な者ほど、独身か結婚生活に不満がある者ほど、婚外セックスに受容的であることを明らかにしている。また、本研究では複数との同時付き合いの経験者が少なかったので浮気経験の有無による相違を分析できなかったが、自身の浮気経験及び被浮気経験との関連を調べてみる必要がある。浮気経験の方が許容度が高く、被浮気経験の方が許容度が低いことが予想される。

第三に、本研究の対象者は未婚の青年であった。そのためか、進化心理学が主張する性的浮気(本研究では性的行動)許容度に性差が見出されなかった。既婚者など対象を広げて調べる必要がある。

第四に、本研究は異性愛者のみを対象とした(本研究の調査対象者のうち、“異性愛者でない”と回答した者は15名と少なかったので分析できなかった)。性的マイノリティにあてはまるかは分からない。例えば、Blumstein & Schwartz (1983) は関係タイプによる差異があり、ゲイはパートナーが決まった一人の人のみ性的関係を持つかどうかに関心がないことを明らかにしている。

引用文献

- Allen, E. S., & Baucom, D. H. 2004 Adult attachment and patterns of extradyadic involvement. *Family Process*, **43**, 467-488.
- Aries, E. J., & Johnson, F. L. 1983 Close friendship in adulthood: Conversational content between same-sex friends. *Sex Roles*, **12**, 1183-1196.
- Atkins, D. C., Baucom, D. H., & Jacobson, N. S. 2001 Understanding infidelity: Correlates in a national random sample. *Journal of Family Psychology*, **15**, 735-749.
- Barta, W. D., & Kiene, S. M. 2005 Motivations for infidelity in heterosexual dating couples: The roles of gender, personality differences, and sociosexual orientation. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 339-360.
- Blumstein, P., & Schwartz, P. 1983 *American couples: Money, work, sex*. New York: William, Morrow. (南博 (訳) 1985 アメリカン・カップルズ 白水社)
- Blow, A. J., & Harnett, K. 2005a Infidelity in committed relationships I: A methodological review. *Journal of Marital and Family Therapy*, **31**, 183-216.
- Blow, A. J., & Harnett, K. 2005b Infidelity in committed relationships II: A substantive review. *Journal of Marital and Family Therapy*, **31**, 217-233.
- Buss, D. M. 1989 Sex differences in human mate preferences: Evolutionary hypotheses tested in 37 cultures. *Behavioral and Brain Sciences*, **12**, 1-49.
- Buss, D. M. 1994 *The evolution of desire: Strategies of human mating*. New York: Basic Books. (狩野秀之 (訳) 2000 男と女のだましあい—ヒトの性行動の進化— 草思社)
- Caldwell, M. A., & Peplau, L. A. 1982 Sex differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, **8**, 721-732.
- Daly, M., & Wilson, M. 1983 *Sex, evolution and behavior: Adaptations for reproduction*. 2nd Ed, Pacific Grove, CA: Brooks/Cole Pub Co.
- 船谷明子・田中洋子・橋本和幸・高木秀明 2006 大学生における浮気感と浮気・被浮気経験との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学), **8**, 99-117.
- Lieberman, B. 1988 Extrapremarital intercourse: Attitudes toward a neglected sexual behavior. *Journal of Sex Research*, **24**, 291-299.
- 牧野幸志 2011 青年期における恋愛と性行動に関する研究 (2) —浮気の判断基準と浮気に対する態度— 経営情報研究 (摂南大学), **19**, 41-56.
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.
- Prins, K. S., Buunk, B. P., & Van Yperen, N.W. 1993 Equity, normative disapproval, and extramarital relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **10**, 39-53.
- 相模ゴム工業：ニッポンのセックス 2013 (http://sagami-gomu.co.jp/project/nipponnosex/love_sex)
- Shackelford, T. K., & Buss, D. M. 1997 Cues to infidelity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 1034-1045.
- Spanier, G. B., & Margolis, R. L. 1983 Marital separation and extramarital sexual behavior. *Journal of Sex Research*, **19**, 23-48.
- Sprecher, S., & McKinney, K. 1993 *Sexuality*. Newbury Park, C.A.: SagePub,
- Thompson, A. P. 1984 Emotional and sexual components of extramarital relations. *Journal of Marriage and the Family*, **46**, 35-42.
- Treas, J., & Giesen, D. 2000 Sexual infidelity among married and cohabiting Americans. *Journal of Marriage and the Family*, **62**, 48-60.

和田 実 1994 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会
心理学研究, **34**, 153-163.

和田 実・西田智男 1991 性に対する態度および性行動
の規定因 (I) —性態度尺度の作成 東京学芸大学紀
要第1部門 (教育科学), **42**, 197-211.

Weis & Jurich 1985 Size of community of residence as a
predictor of attitudes toward extramarital sexual
relations. *Journal of Marriage and Family*, **47**, 173-178.

(受稿: 2017.7.14; 受理: 2018.3.27)
